

エデュコ **Educo**

地球時代の教育情報誌

No.36
2015年 冬



巻頭インタビュー p.2
関西大学・大学院教授
田尻 悟郎さん

知っておきたい教育 NOW p.4

秋田と福井の高学力の秘訣

ープロフェッショナル・ラーニング・コミュニティー

「付きたい力」を明確にし、「学び合い、伝え合い」で生徒を伸ばす

きょういく見聞録 p.8

自分で選択していく人生を

～小田原市・アートワークショップを活用した、障がい者の自立支援～

地球となかよしトピックス p.10

地域との“協働”をめざすスクールコミュニティ作り
新潟県新潟市立坂井輪小学校

インフォメーション 北から南から p.12

第12回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

モノ・コトの関係性を見抜く視点

ー博物館の展示で編集力を養うー

神奈川県立生命の星・地球博物館

コラム p.19

「道徳」教科化をめぐって

ほっとな出会い p.20

ドナルド・キーン・センター柏崎
理事・学芸員

吉田 真理さん

「この先生は、自分たちのために これだけやってくれている」と思ったとき、 子どもたちは初めて心を開くんです。

関西大学・大学院教授 **たじり 田尻 悟郎**さん



PROFILE

1958年島根県生まれ。神戸市、島根県内の中学校教諭を経て、現在、関西大学・大学院教授。2001年に、(財)語学教育研究所よりパーマー賞を受賞。Newsweek誌の「世界のカリスマ教師」の一人に選ばれて以来、カリスマ英語教師としてNHKテレビ「プロフェッショナル」、「テレビで基礎英語」講師など各マスコミに登場。著書に『田尻悟郎の英語教科書本文活用術!』（教育出版刊）、『チャンツで楽習! 決定版』（NHK出版）ほか、著書多数。

中学校で長くご指導なされたあと、
2007年から関西大学で教鞭を
とっていらっしゃいます。

中学校教師になって26年目の頃、
ドイツのシュタイナー教育の権威、
クリストフ・ヤフケ先生にお会いし
ました。先生は僕の授業をご覧にな
ると「すぐ大学に転職しなさい。今、
あなたの生徒は151人。もしも
151人の先生を育てたら、その
背後に各100人の生徒がいると
して、1万5千人の生徒を助ける
ことができるでしょう? もっと大
きな視点で物事を見なさい。」とおっ
しゃった。衝撃的でした。
その後、文部科学省のフォーラム

で森住 衛先生(当時大阪大学)が
「今後、教員を養成できる教員の養
成が急務である。」と言われた時に、
大学で教えようと決意しました。

教えてみると、中学生も大学生も
同じです。授業が面白ければ夢中
になって取り組む。大学では、生徒が
動く教材作りができるようになるま
で鍛えるので、教科教育法の授業を
受けている学生たちは、すごく苦し
む。彼らには「教員になるってこと
は大変なことなんやで!」と言いま
す。一般教養の授業を取っている学
生も「こんなハードな授業は受けた
ことがない。」と言います。でも、
できると「よっしゃー! 次は何や

りますか。」「準備できないでこの授
業を受けたら苦痛です。でも、準備
して受けたら楽しいです!」と言
います。

教員の仕事は「何かを好きにさせ
てあげること」。僕の場合は、まず
英語と教職のすばらしさと、関西大
学体育会野球部顧問として野球のす
ばらしさを伝えることです。

そして、生徒たちの仕事は、でき
ないことに向かっていくこと。「難
しいから」「無理だから」と言って、
そこにチャレンジしないのは絶対に
だめです。生まれたときは何もでき
ないし、歩くこともできない。一つ
ずつ覚えていってできるようになる
のが生きること。「できることを一
個ずつ増やしていくのが人間の仕
事。それを拒否するんか?」「『人間
力』は死ぬ直前まで上げられる。で
きないことをできるようにするまで
努力しなさい。」と言うと、彼らは
考え始めます。卒業した生徒たちが
街で僕を見かけた時、声をかけてく
れるか、「うわっ、田尻や!」と隠
れるかは、授業の質で決まります。

お忙しくて、先生が生徒さんたちを
十分ケアできない場合もあると思

ます。何かアドバイスをいただけませんか。

どんなに忙しい時でも提出物に「見ました」というハンコを押さないうこと。生徒に努力を促しておいて、自分はハンコだけではだめです。本当に見ていたら何かを思うはず。がんばっているのに、まちがった練習をしている生徒にアドバイスや励ましのコメントを書いてあげる。生徒ががんばった時間を認めたいので、先生も時間を割いてくれる、という実感があって初めて生徒たちは「またがんばろう」と思う。やはり大切なのは、先生方が誠意を尽くすことだと思います。もう一つは、授業やプリントの「量」ではなく「質」を高めること。「こういう活動を作れば、生徒は動く、夢中になる」「教科書をこう使えばいい授業になる」

という観点がなければ、生徒たちは乗ってきません。

授業を拝見していると、先生のお顔の表情が、とても豊かですね。

最初は表情の使い方をすごくトレーニングしました。以前は「田尻先生は怖い」というイメージを生徒が持っていて、僕もそのイメージで行こうと思っていました。野球などのスポーツごとをしていると、最後まで勝つチームは一つしかありませんから。練習中に怒鳴ることもあった。でも、怒鳴り声ってよいいに自分を怒らせるんです。常にいらいらしていました。すると子どもたちは萎縮します。鳥根の中学校で教えていた時、英語の授業の前に、僕のこととが怖くて保健室で泣いている子もいたそうです。「このやり方じゃだめだな」と、まず漫才を勉強しました。でも漫才って、人を馬鹿にするところがあるので、今度は落語を勉強しました。落語って、すごい芸能です。一人で何人もの役を演じて、なんの舞台装置もないのに、観客を何百年も昔の世界に連れていく。落語家を見て、表情や声って大事ななと思いました。それからずうっと鏡

に向かって練習しました。

大学では野球部の部長もなさっておられます。昨年は明治神宮野球大会に42年ぶりに出場され、学生さんたちの好プレーと礼儀正しさが印象的でした。

2009年に、うちの野球部員が事件を起こして、秋のシーズン出場辞退するという不祥事がありました。そのあと野球部立て直しのために、僕が部長をすることになりました。就任後は、まず学生たちに「この人は敵じゃない」と思ってもらうために、グラウンド整備やボール拾い、水まきなどを率先してやりました。すると学生たちが「先生、僕がやります」と言うようになった。そこで、「いや、これ趣味やねん。出身校どこや？」と聞いたたりしながらいっぱい話をして親しくなりました。試験一週間前には勉強会もします。試験後にグラウンドに出ると、学生が「先生！中国語いきました！」と走って言いに来る。かわいいですよ。就職活動前の3回生には、中学校くらいから現在までのライブヒストリーを書かせます。一つがA4用紙15枚くらいになるのですが、40人近

い学生全員の文章をすべて読み、「がんばったな」「ここがお前のいいところなんやで」と確認して、自信を持たせてから、エントリーシートの書き方や面接の練習に入ります。毎日来る学生たちに、何か月もつき合います。何度も面接に落ちる学生もいる。学生たちは「もっと簡単に内定してもらえらるものだと思っただけ」と言います。1年近く就職が決まらない学生もいます。苦労してやっと決まった時に、駅から「内定もらいました！」と電話をかけてきて、そのあと会ったら、ぎゅっとハグされたこともあります。その学生たちが、下級生に「絶対、田尻先生の言うことは聞け」「困ったら田尻先生に連絡しろ」と言ってくれる。だから僕は「ちゃんと日本語書け！」とか言いながら、たくさんエントリーシートを見るんです。

結局、彼らのために費やした時間が大事なんです。「この先生は、自分たちのためにこれだけやってくれている」と思った時、学生たちは初めて心を開いてくれる。だから、教員にできるのは誠意の積み重ねしかない。それは中学校であろうが大学であろうが変わりません。

秋田と福井の高学力の秘訣

— プロフェッショナル・ラーニング・コミュニケーション —



国立教育政策研究所
教育研究情報センター
総括研究官 千々布 敏弥

はじめに

秋田県と福井県は全国学力・学習状況調査で1位、2位を続けている。その原因はどこにあるのだろうか？ 最近刊行された志水宏吉+前馬優策編著『福井県の学力・体力がトップクラスの秘密』（中公新書ラクレ、2014）で志水氏は「秋田では、対話型・学び合い型の授業が一般的であり（中略）福井の授業は、教師主導の伝統的なタイプのものが一般的であったが、子どもたちの学習規律・学習習慣がすばらしく鍛えられている」と記述している。志水氏の分析は、両県の学校を訪問してきた私の印象とも重なる。

全国学力調査を追加分析した委託調査によると、各都道府県における学校平均点は全国平均の前後に分散しているのに対し、秋田県と福井県の学校平均点だけ、全国平均より上位の学校がほとんどとなっている（田中博之「全国学力・学習状況調査において比較的良

好な結果を示した教育委員会・学校等における教育施策・教育指導等の特徴に関する調査研究」（平成22年度文部科学省委託研究報告書、2011）。このことは、子どもの学力だけでなく教師の教育力が全体的に高いことを示している、私は受け止めている。なぜそうなっているのか？

秋田の秘訣

秋田県と福井県とともに指摘されているのは、授業規律、教師集団のまとまり、家庭環境の良さなどである。私が秋田の学校を訪問した際は、すでに指摘されている強みに加え、授業スタイルが学校全体で統一されていることに感心した。授業の進め方だけでなく、板書の仕方、子どものノートの取り方が統一されている。子どもは低学年の頃から同じスタイルの授業を受け続けるため、どのようなノートをとればいいのか分かっている。このような授業の進め方は、初任者研修の段階か

ら教育センターで指導されているとのことである。

2013年度全国学力・学習状況調査では、「児童生徒の発言や活動の時間を確保して授業を進めた」「学級やグループで話し合う活動を授業などで行った」「授業の冒頭で目標（めあて・ねらい）を児童生徒に示す活動を計画的に取り入れた」「授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れた」という指導を行っている学校が、有意に学力平均点が高い傾向が示されている。秋田県はこれらの間に「当てはまる」との回答が全国平均より高い。

このような結果が出てくる背景には、秋田県では児童生徒の発言、話し合い、振り返りの時間等を授業の中で確実に確保するためのルールづくりが行われていることが考えられる。秋田で見られる授業の流れは、授業の初めに本時のねらいを示しながら発問を提示する↓発問に従いまずは自力解決を図る↓一人学びのあと、ペアやグループで話し合い、最後に全体で話し合う↓授業の最後に学んだ内容を確認し、振り返るといものである。導入、展開、まとめという全国共通の枠組みと同じに見えるが、特に展開段階において一人学びとペア・グループによる話し合いの段階を入れていることが特徴的だ。

これらの指導スタイルを、秋田県は指導主事の学校訪問を通じて県全体に広めている。指導主事たちは年に3回集まり、年度毎の方

針と中間評価、年度末評価を行いながら指導している。

福井県の秘訣

秋田県と同じ視点で福井県を見ようとする
とわかりにくい。秋田が実施しているような
授業スタイルの統一を、福井は行っていない。
では、何が福井の高学力を導いているのだろ
うか。

高い授業規律に支えられた授業の様子は志
水本を参照いただきたい。私が注目している
のは教師同士のつながり、連帯意識の強さが
他県に秀でていること、それを支える校長の
リーダーシップと指導主事の指導姿勢だ。

私が福井県の学校を訪問して感心したの
は、校長が学校の弱点を隠さないことだった。
弱点を示した上でそれをどう指導しているか
を説明する。これまで学校評価のために訪問
した学校で学校の弱みを隠そうとする校長を
多く見てきた私にとって、学校の弱みを隠さ
ない福井の校長には斬新な好印象を抱いた。
そのような校長は一人だけではない。私がお
会いた数名の校長は皆同じ印象だったし、
福井県の学校を訪問している他県の教師も
「20校以上訪問して、はずれだと感じた校長
が一人もいません」と語っていた。

教師集団のつながりも強い。私が
2011年に全国の小中学校を対象に実施
した調査で、学校の状況を把握するための指
標として「教員間のコミュニケーション」「学

校全体で課題を共有」「授業の水準」等を設
定し、その合計数値の都道府県別平均点を求
めたところ、最も高いのは福井県だった。

福井県の教師集団のつながりの強さは、学
年会、教科会の持ち方に顕著に表れている。
校内で実施するテストを作成するとき、他県
であれば教師間で分担する場合が多いだろう
が、福井では教科会や学年会の中で協働して
作成している。学力テストの成績に課題が見
られたとき、その対策が練られるのも教科会
や学年会だ。教え方をどう変えるのか、どの
ような課題を子どもに与えるようにするの
か、具体的な対策が話し合われている。

中学校で同じ教科の教師が複数いると、学
年別に担当を分けることが多いだろう。福井
県では、一人の教師が全学年を担当している。
通常は同じ学年を異なる教師が教えていると
教師による力量の差が現れることは避けがた
い。それを福井の学校では教科会の綿密な打
ち合わせによって、どの教師も同じような授
業が実践できるようになっている。

福井の指導主事は、それぞれの学校の取り
組みを尊重し、校長は個々の教師を大事に育
てている。その体制が、教師間のコミュニケー
ションなど教員間のまとまり方、授業の水準
に影響し、それが子どもの学力に影響してい
ると思われる。

両県に共通するプロフェッショナル・ ラーニング・コミュニティ

両県に共通する要素を一言で表そうとすれ
ば、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニ
ティということばがふさわしい。プロ
フェッショナル・ラーニング・コミュニティ
とは、教師が自らの実践を振り返る上で、彼
らが普段仕事をしている学校の教師集団のつ
ながりが重要であることを主張したものであ
り、近年欧米で学校改革と教師の力量向上の
ためのキーワードとなっている。日本の学校
はほとんどが授業研究に取り組んでいること
で、プロフェッショナル・ラーニング・コミュニ
ティを構築していると言えるのだが、特に
福井県のレベルは高い。秋田県は、県全体の
まとまりが強く、県レベルでプロフェッショ
ナル・ラーニング・コミュニティを実現して
いると解釈できる。

詳しくはこのたび刊行された拙著『プロ
フェッショナル・ラーニング・コミュニティ
による学校再生』（教育出版）をご覧いただ
きたい。



「付きたい力」を明確にし、 「学び合い、伝え合い」 で生徒を伸ばす



浜松市立細江中学校
主幹教諭 御手洗 実

本校では、中学校教育に対する時代の要請に応えるために、昭和53年に研究主題「ひとりひとりを伸ばす指導法」を設定し、これまで副主題をさまざまに変えながら36年間継続して研修を積み上げてきた。そして、毎年、公開授業学習会を開き、その成果を発表している。

昨年度からは、自分で主体的に考えて行動することが苦手な生徒が多いという実態を考慮して、「話し合い、伝え合う活動」を通して、「コミュニケーション能力」や「他者と積極的に関わる態度」を身に付けることをめざし、副主題を「『学び合い、伝え合う生徒』の育成」としている。

「何を」学ぶか、「いかに」学ぶか

私たち教師は、子どもたちに、実生活に生きてはたらく力を、また、時間が経っても剥がれ落ちない確かな力を身に付けさせたいと

願う。そして、その力をいかに付けるかということを考え続けてきた。

「何を」学ぶか

↓「付きたい力」を明確にする

「何を」学ぶか。さしあたってそれは、学習指導要領に示された指導事項ということになるが、こと授業となると、往々にして、活動はあるけれども一体何の力が付いているのかよくわからない、ねらいがあいまいでどんな力が付いているのか測れないといったことが見られる。

そこで教師は、絶えず、自身の授業を振り返り、一体子どもたちは、「何ができるようになったのか」「どんな力が付いたのか」ということを問い続け、その上で、目標、手立て、評価の順に問い直してみることが大切である。

本校では、まず、『付きたい力』を明確に

すること」を研究の柱に据えた。そして、以下の4点を行った。

○年間指導計画の中に単元構想表を設け、単元の中で特に押さえた目標を明確にした。さらに、それを見直し、「言語活動の充実」に向けて、具体的な活動や評価の手立てについても検討を加えた。

○指導案の単元構想に、「既習事項や未習事項とのつながり」「生徒の実態から考慮した単元で付きたい力」を記載した。

○研究授業では、参観の視点の一つ目に、「生徒に『付きたい力』を明確にした授業になっているか」ということを掲げ、授業後の反省会では、それを、協議の第一の視点として、教科の枠を超えて話し合った。

○静岡大学教育学部の先生を講師に招き、「思考力」についての学習会を行った。

「いかに」学ぶか

↓「学び合い、伝え合い」を通して

「いかに」学ぶか。本校では、この2年間、副主題にある「学び合い、伝え合い」に重点を置いた。特に、「話すこと 聞くこと」を中心とした「言語活動」を、どの授業にも取り入れることとした。そして、具体的には、以下の4点を行った。

○教科部会等で「話し合い、伝え合う場」について話し合い、共通の押さえをすることともに、具体的な指導場面を列挙した。

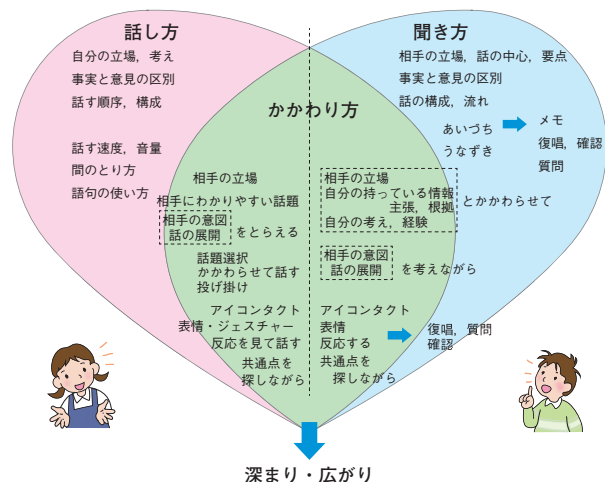


図 「話し方」「聞き方」「かかわり方」のポイント (国語科)

授業の実際

ペアや小グループ (2〜4人) で交流する際には、以下の3点を押さえた。

- ・ひとりひとりに、まず、話す材 (自分の意見や考え) をもたせること。(個↓小グ

○活用型・探究型学習を取り入れると共に、学習形態も工夫し、言語活動の充実を図った。

○校内研修において、国語科教師による「話し合い」についての学習会をもった。

○研究授業では、参観の視点の二つ目に、「生徒が互いに他者とかかわる中で、自分の思いや考えを伝え合うことができているか」を掲げ、授業後の反省会で振り返った。

ループ↓全体

・机の配置を工夫すること。

(2人:L字

型、3人:T

型、三角、4人

型、I型など)

・ペアでの交流は、人を変えながら3回以上

繰り返すと効果的であること。

○全教科、領域で取り組む「話し合い、伝え合う場」の工夫 ◆道徳

真の友情について葛藤する主人公の心情を、円状の心情グラフを用いながらペアで3回交流することにより追体験させ、より深く道徳的価値に迫っていった。

○多様な材を生かす (人材、機材、地域教材) ◆美術科

地元にお住いの日本画家を招いて、対話型鑑賞の授業を行った。2枚の日本画を比較しながら感じたことや気付いたことを鑑賞カードに書いた後、グループ交流をする。その後、その絵を描いた画家に登場してもらい、対話をしながら、鑑賞の基本から普段は聞くことのできない制作意図や手法まで、実際の制作者から直接伺うことで、より深い鑑賞ができた。

○「振り返りの記述」を交流する ◆国語科

ひとつの単元が終わった時に、そこで何を



ペアでの交流の様子

学んだのか、どんなことに気付いたのかを記述し、互いに読み合った。さらに、他クラスや他校の生徒の記述をプリントにして紹介することで、より深い価値の形成をめざした。

詩、短歌、漢詩の学習をしてから、自分の物事の見方は大きく変わった。それは、「周りのものすべてに興味をもつ」ということだ。興味をもち、疑問が生まれ、疑問が生まれれば答えを探し出す。本当に小さなことでもこの自問自答を繰り返していった。これが何より楽しいのだ。本気になって深く考え自分だけの答えを導き出す。(中略) 考えて考えてやっと答えを見つかるというものも、一つの楽しさだ。詩や短歌を書く人たちは、このようなことと似ているのではないだろうか。物事を自分の感動を自分だけの言葉でつづる。それを楽しみとしている。自分も詩の創作をしてそれを感じた。

今回の学習で得たものはとても大きいと思う。自分は、自分だけの世界を創っていきたい。自分だけの思いを自分だけの言葉で。そう強く思わせてくれた。(2年生 国語科「振り返りの記述」)

終わりに

右記の記述のように、「学び合い、伝え合う場」を授業に設定し、全教科、領域で実践することで、「知りたい・やってみよう」という探究心やものの見方、考え方で育ちつつある。

さらに、子どもたちに「どのような力が付いたのか」という評価の視点から、「付けた力」とそのための手立てについて見直し続けたい。

「みなさん、A君はみんなのようにはことばを話せないかもしれないけれど、みんなが話すことばはわかります。だから、たくさん話しかけてください。週に一度、ほかの学校にある『ことばの教室』へ勉強に通っていますから、その時はみんなで送り出してくださいね」。

その後、A君が「ことばの教室」へ出かける時には、みんなから「A君、行ってらっしゃい！」と言われ、クラスに戻ると「おかえりなさい」と元気な声で迎えられていました。

ある日、国語の授業中に、お手本にとA君をあてて黒板へ文字を書かせたのですが、先生が手を添えて書き順通りに書かせるなど、きめ細かな指導をされていました。A君にとっては、自分にもできると自己肯定感を味わい、周りの生徒たちにとっては、「A君すごいね！」と、できたことを認めるきっかけにもなりました。

こうして共に育った生徒たちは、現在成人に近い年齢になっており、今でも電車の中や町でA君を見かけると、「A君！ 元気か！」と声をかけるそうです。子どものころからクラスと一緒に学ぶことが、障がいの理解に最も効果があるようです。

小田原市では、小中学校において、障がいのあるなしにかかわらず特別な配慮を必要とする生徒に対して、個別支援員の配置を行っています。今後も支援を必要とする時期に支援員が寄り添い、ひとりでも多くの児童・生徒の「困り感」を軽減し、その支援が必要なくなるまで成長を見守っていただきたいと思えます。

アール・ド・ヴィーヴルのめざす ソーシャル・インクルージョン

高校を卒業するころになると、障がいのある生徒たちの保護者の不安は増大します。まず、高校卒業後に通える大学や専門学校はありません。選択肢は一般就労か福祉施設に入る、または在宅。12年間



の学校生活でのスキルが活かせる職場はないのでしょうか。国は障がい者雇用達成率2%と定めていますが、小田原では数社の就職先と特例子会社が一社あるの

み、養護学校卒業生の就職率は2割です。そのほとんどが福祉施設へ通いますが、その活動内容に選択肢があるとは言えません。

そこで、障がいのある人たちの個性を活かしたソーシャルワーキングとは何なのかを追求する活動体として、アート活動を中心に彼らが自分らしく生きることを見つける、「NPO法人アール・ド・ヴィーヴル」を設立しました。

ダウン症や自閉症、知的障がいのある人たちが、様々なワークショップに参加することで、基本的な生活力を身につけながら潜在的な可能性を磨き、得意なことや、やりたい気持ちになれることを見つめるサポートをしています。絵画、織り物、ヨガ、英会話、フラダンス、料理、陶芸、芸術鑑賞、野外ワークショップなど、活動は多岐にわたります。例えば料理ラボで



では、生活に欠かせない食に取り組み、彼らが包丁や火を扱い調理ができるようになることで、自立へ向けて活動します。自分が作った食事を仲間と共に食べる楽しさは、さらにチャレンジする意欲へつな갑니다。

アートワークショップでは、彼らの表情は真剣そのもの、人が大勢いる空間が一瞬シーンとなるほどの集中力！ 枠に収まらない作品や、繊細な線描、精巧に作られた造形物にはいつも驚かされます。競争社会の中で疲弊した心を持つ人が増えるなか、ピュアな心を持つ人の創作活動とその作品には生きるエネルギーがあり、私たちの生活の中で、彼らは必要な存在なのだ実感するのです。展覧会では、ふだん障がい者と関わりのない人たちも多く訪れ、長い時間をかけて作品と対話していかれます。

現在、小田原駅周辺の店舗に、アール・ド・ヴィーヴルの商品が並ぶようになりました。人々の生活に、障がいのある人たちが作りだす作品が選ばれ、愛用されています。絵画作品のリースを利用してお店や学校に飾っていただき、鑑賞していただく機会も増えてきました。

障がいのある人とない人が共に必要とされる存在であること、自分らしく生きることを大切にする小田原をめざして、これからも活動は続きます。☺

自分で選択していく人生を

～小田原市・アートワークショップを活用した、障がい者の自立支援～

神奈川県西部に位置する小田原市は、戦国時代に後北条氏の「城下町」として発展し、江戸時代には東海道屈指の「宿場町」として栄え、また明治期には政財界人や文化人たちの「別荘、居住地」として愛されてきた。市内のNPO法人「アール・ド・ヴィーヴル」(2013年設立)は、障がいのある子どもから大人までを対象に、アートを中心とする創作活動の場を提供し、さまざまな個性を生かした作品や表現活動を社会へ発信している。「アール・ド・ヴィーヴル」とはフランス語で「自分らしく生きること」。障がいのある人たちが、自分らしく生きることを追求する場として活用し、障がいのある人もない人も共に必要とされる社会をめざして、社会福祉事業所の設立を計画している。

NPO法人アール・ド・ヴィーヴル 理事長/
小田原市教育委員長職務代理者
萩原 美由紀 (はぎわら みゆき)



知的障がいのある子どもの暮らし

みなさんは、知的障がいのある子どもたちが、学校以外の場所でどんな生活をしているかご存じでしょうか？ 放課後、友達と公園で遊んでいる？ 週末には友達を誘って遊園地へ出かける？ それともショッピングやスポーツを楽しんでいるのでしょうか？

「こんな当たり前な暮らし、小学生ならできる」と思われるかもしれませんが。誰と約束して、どこへ行くのか。自分の意思で行動することは、成長する過程において、誰にでもできることのように思うかもしれませんが。

ところが、障がいのある子どもにとって、これらはかなりハードルが高いことなのです。

障がいのあるお子さんすべてがそうなのではありませんが、何か行動するとき、保護者や介助者が予め決めたことに追随することが多いのは否めません。

障がいのある小学校低学年のお子さんなら、保護者や先生のおっしゃることに従うかもしれません。しかし、成長するにしたがって疑問を抱くものです。

「自分がしたくもないことをなぜやるの？ どうして自分では選ばせてもらえないの？」

「着るもの、食べるものや、外出先だって、誰と遊びたいのかも、自分で選べるよ」と叫びたくなる

こともあるでしょうが、うまく伝えられない子どもたち。

彼らは、「自分では何も選択できない障がいのある子ども」と思われてしまい、からだが大きくなってでも養護され続ける存在なのでしょうか？

学校の帰りに友達を誘って寄り道してみる。今夜はカレーが食べたい！と、お母さんをお願いしてみる。一人でお風呂に入りたい、歯磨きも自分がんばってみる。どんな服に着替えるのかだって自分で選びたい。障がいがあるからといって、何でもまわりの大人が決めるわけではないわけではないのです。

健全なお子さんに比べれば、その成長はゆっくりかもしれません。言葉でうまく伝えられないかもしれませんが、だからこそ、まわりの大人が彼らと視線を同じにして、本人の意思を尊重し共感する。ひとりの自立した人間として接すれば、彼らは自分で選択する力を発揮することができるのです。

障がいのある生徒が普通学級にいる意義と効果

ある小学校で、ひとりの知的障がいのある児童が普通学級で学び始めました。クラスの一人一人に、違った個性があります。障がいのある児童も分け隔てなくクラスの一員であると捉え、担任の先生がおっしゃいました。



▲習字の時間。ボランティア同士で気軽に誘い合うことから活動が始まる。「ボランティアを始めてから、道で子どもたちに会うと声をかけてくれるのが嬉しいです」とおっしゃる人も。

新潟県新潟市立坂井輪小学校

地域との“協働”をめざす スクールコミュニティ作り

「地域の持つ力を学校に還元し、学校の持つ力を地域に還元する」——新潟市立坂井輪小学校（1975年開校、松崎一昭校長、708名）では、学校と地域との関係を「地域コミュニティ」として捉え、「地域の中の学校」という視点から地域住民による学校支援ボランティアなどを取り入れた教育活動「子どもふれあいスクール（どんぐりランド）」の運営などを行っています。地域と学校が積極的に協力することにより、学校、児童、そして地域住民が共に発見・成長し、互いにプラスとなる関係作りをめざす取り組みを紹介します。

「地域の中」の学校アップ

新潟駅から車で約30分、静かな住宅街の中に新潟市立坂井輪小学校（児童数708名）があります。

スクールコミュニティ導入のきっかけについて、松崎校長先生に伺いました。

「これまでは地域と学校の二つが別々に並列しているイメージがありました。しかし、学校は地域の中の一つの機関です。学校を一つの『地域コミュニティ』として捉え、地域と学校が互いの教育力を貸し合い、共に成長できる『協働』をキーワードに、コミュニティ形成に取り組ん

でいます。活動の一例として、まちづくり協議会事業の『地域ふれあいもちつき大会』支援などのほか、子どもたちの安全確保のため、地域と学校と警察などが連携した緊急事態対策や、具体的対応検討も、保育園や中学校と共に始めています。また、地域活性化につなげていく形で、学校の子どもの育成支援だけでなく、この地域の皆さんが互いに関わりながら、子どもも大人も生きがいを持って生活できる場をつくりたい。学校と地域が互いに教育力を貸し合う形が、「WinWin活動」だと考えています。学校にとっても、地域にとっても良い形の

▶多くの大人で子どもたちを見守ることは、よりきめ細やかな教育につながる。

▼「ボランティアをしながら、自分も勉強させてもらっています」と複数の声。ボランティア活動が自分の生き甲斐を見つけるきっかけになることも。



▲「人と人の絆をもっと高めていきたい。小学生、教職員、地域が一体となって、共に育ち合うことができれば」と校長先生。

▲学校に必要なボランティアの人数は最低限揃え、それ以外のことはボランティアの人々が自主的に動き始めている。



▲技術のある人に教えていただくのは基本だが、例えばミシンが使えなくても、別の活動に誘うことがボランティア同士の中でできつつある。



▲予定があいている時に気軽に参加できるのも、ボランティアを長く続けられるポイント。学習支援や部活動指導、登下校時安全確保など、学校のニーズに応じさまざまな活動がある。

ものを、もっと広く使っていきたいと願っております」。

ボランティアによる教育支援

学校と地域の皆さんとの間をつなぐのは、登録コーディネーターの人々です。登録者は約400名。ボランティアの活動内容は、新一年生の下校時見守りや、二年生の野菜鉢植え指導、習字練習や家庭科でのエプロン作成などの学習サポート、市内で開催される「日曜音楽祭」に向けた四年生への楽器演奏練習指導などのほか、遠足付き添いや本の読み聞かせ、七夕ほか各種行事運営など、多岐にわたります。学校から依頼を受けたコーディネーターは、まず学校側のニーズを把握し、自治会回覧板やチラシなどを使って支援ボランティアを募集・派遣します。時には、スーパードレジ待ちや、バス停で並んでいる人などに、前に並んでいる人にお

声をかけて参加していただくこともあるそうです。

まちづくり協議会会長の下川さんは「校長先生から、『これまで縦割り構造だった学校のための活動に、横軸を入れてほしい』とお話がありました。コーディネーター制度などにより、関係者が以前よりも情報交換できるようになりました」とおっしゃいます。

また、まちづくり協議会事務局長の宮さんは、「以前は『地域・学校・保護者は一体』という言葉が先走っていた感がありましたが、今は学校との関わりが増え『一体』化が実行されている、と感じています。学校と地域の間を上手く取り持つてくれる素晴らしいコーディネーターさんたちに感謝しています」。

WinWinの関係を

「地域のことは地域で考え、自ら行動する住民自治」を支えるために、コミュニティの充実と活性化を今後

も支援していきたい、と語る校長先生。住民の皆さんが学校を通してつながり、新たな出会いによって互いに学び合い、育ち合っていく、学校と地域のどちらにとっても有益な「WinWin」の取り組みは、さらに進化していきます。

静岡

「子どもが安心して学べる学校づくり」に向けての「ふじえだ型ピア・サポート」の実践

藤枝市教育委員会

藤枝市では、平成22年度から教育委員会の策定指針「子どもが安心して学べる学校づくりに向けて」に基づき、「いじめを許さない学校づくり」「思いやり溢れる学校づくり」の二つを柱に市内27の全小中学校で「ふじえだ型ピア・サポート」に取り組んでいます。「人と支え合い、つながり、関わり合う活動」を大切にしつつ、各校の教育活動（授業、行事、縦割り活動等）を見直し、「支え合い」「関わり合い」などの活動を今まで以上に大切に、意図的・計画的に取り組んでいます。これらの活動を通じ、主体的に友達と関わる気持ちを高めた子どもたちが教師の指導・支援のもと、ピア・サポートプログラム等で身につけた知識やスキルを活かしつつ、友達（仲間・ピア）を思いやり、支え合う学校風土をつくっていかうとするのが、「ふじえだ型ピア・サポート」です。

各校では、市による8つの提言、①成長を促す生徒指導を学校全体で推進、②推進組織を明確に、③「我が校のピア・サポート」を共通理解する場を持つ、④活動と活動を結びつけ、意図的・計画的指導を展開、⑤実践前のトレーニング・実践後のふりかえりを大切に、⑥子どもたちの組織を活かす、⑦「見える化」で子どもたちの取り組みを認める場をつくる、⑧家庭や地域に積極的にアピール、をもとに活動に取り組み、その結果、友達の優しさや思いやりに感謝するだけでなく、自分も人に優しくなりたい、自分を高めたい、という思いが生まれています。また縦割り活動を通して「憧れの連鎖」が起こり、上級生の良い変化が下級生へと引き継がれています。今後も、藤枝市では市内全校でピア・サポート活動を充実させ、「子どもが安心して学べる学校づくり」を進めていきます。



岩手

ふるさとの復興を担う「人づくり」の展開

～「自分から」かわかり、学びを深める児童の育成～

宮古市立宮古小学校校長

笹川 正

平成23年3月11日に発生した東日本大震災・大津波。本校体育館も避難所として、一時は750名が約4か月間避難生活を送りました。あれから3年半が経過し、沿岸被災地と内陸部との復興教育に対する意識や取り組みの差、復興教育の取り組みの形骸化が懸念される中で、本校は、震災後に県内でもいち早く「復興教育」を学校経営の中心に据え、「各教科等」における指導の充実・深化を通じ、10年後、20年後の「ふるさと・宮古」の復興・発展を創造していく子どもの育成をめざして取り組みを進めてきました。

具体的には、低学年・特別支援学級は「体育科」（助け合う）、中学年は「社会科」（かわかり合う）、高学年は国語科（伝え合う）を重点教科とし、「『自分から』かわかる」を設定した授業を実践しています。ほかに全学年による防災教育を中心に据えた「特別活動」（つなぎ合う）を通して、総合的な「復興教育」の学びの推進を図っています。また「宮古小復興教育学習プログラム」の整備や「宮小エクササイズ」の創作、オリジナルの教材開発など、児童や学校・家庭・地域等の実態を踏まえた本校独自のメニュー開発により、教育活動を系統的に推進していくことが可能となり、子どもたちは、「自分から」を合い言葉に、日常化された学びを進めています。

「復興教育」を通じた本校の「人づくり」は、とりもなおさず「教師づくり」でもあります。私たちは、子どもと教師が復興教育の取り組みを通して共に学び合い高め合う中で、「ふるさとの復興（未来）を担う人」として成長していくことが、被災地における「人づくり」であると考えています。10月に学校公開研究会を開催した私たちは、その先を見据え、新たな歩みを進めています。



福岡

地域の期待と願いで創る 小中連携校への責任

福岡市立住吉中学校校長
坂井 俊介

福 福岡市では児童生徒数の減少傾向に伴い、福岡市学校規模適正化検討委員会が設置されています。

本住吉中学校ブロックは、福岡市博多区に位置し、2小学校の少子化に伴う小規模化や施設の老朽化、中学校は隣接の南区に設置されている等、様々な課題を抱えています。

その解決策として、平成27年度開校をめざして、小学校2校と中学校1校の計3校を統合再編し、施設一体型の小中連携校を新設することになりました。

開校に向かって、校区の自治協議会、PTA、学校代表者と行政の代表25名で構成した組織「開校準備委員会」を立ち上げ、新設校の教育理念、校名、校章、校歌や教育課程、通学路、校舎施設等、4年をかけ会議を持ちました。

特に、本委員会で時間をかけた議題に、新設校の校名の検討がありました。2つの校区の歴史と伝統は限りなく地域に根付いており、各委員の思いや期待が熱く語られました。各委員の方々の発言では、子どもたちへの愛情と地域の歴史や伝統の中ではぐくんできた学校への期待が熱く語られ、新連携校への期待の大きさを実感しました。

一方、小中教職員の合同研修会議では、小中の教育課程、とりわけ45分と50分と異なる時制や週時制・年間行事の調整に多くの時間を要しました。そのほか、制服の見直しや通学路の問題等、まだまだ膨大で多岐に及ぶ課題が残っており、残りの時間に追われながら一つ一つを解決しているところです。多くの期待と願いに応えるべく、地域に根ざし誇れる学校創りに小中教職員協働して取り組んでいます。



広島

平和教育プログラム

～平和で持続可能な
社会の形成者の育成を目指して～

広島市教育委員会

広 島市は、昭和20年8月6日、原子爆弾によって壊滅的な被害を受け、多くの人命と街を失い、生き残った人々も被爆の苦しみを背負うことになりました。こうした中にありながら、平和を願い、平和都市の建設を進めてきた先人のたゆまぬ努力によって、めざましい復興を遂げました。しかし、長い年月の経過とともに、被爆者の高齢化が進み、被爆体験の継承を重点課題として、世界恒久平和の実現のために自主的・積極的に取り組むことができる児童生徒の育成を図ることが、喫緊の課題となっています。

平和教育プログラムは、児童生徒が、被爆の実相等の事実を捉え、その事実を通して未来を志向し、平和で持続可能な社会の形成者として必要な知識や能力等を身に付ける内容です。小・中・高等学校の12年間を見通して、児童生徒の発達段階を踏まえ、学年ごとに目標を設置し、各学年3時間の平和学習を各教科・領域に位置付けて実施できるように構成しています。

実際の授業では「ひろしま平和ノート」を活用し、自分の平和に対する思いをノートに書き込みながら学習を進めていきます。小学校段階では、絵本や読み物等を教材として、被爆当時の広島の様子や復興の歩み等を学習する内容となっており、中・高等学校段階では、写真やグラフ等の資料を教材として、世界平和にかかわる諸問題や平和な世界を実現するための広島の役割などについて学習する内容となっています。また教員向けに、指導資料を作成し、展開のポイントや板書例、指導の留意事項などを示して指導の充実も図っています。



地球となかよしメッセージ

12回目を迎えた「地球となかよしメッセージ」。
今回も、素晴らしい作品がたくさん寄せられました。

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省，日本環境協会，全国小中学校環境教育研究会，毎日新聞社，毎日小学生新聞

入賞作品発表

地球と
なかよし
大賞

自転車の旅での出会い

山田 大地 台北日本人学校 3年

ぼくは、今年の夏に台湾を自転車で旅しました。台湾一周が目ひょうですが、今年は450キロを移動しました。台湾の人びとはみんな親切でした。自転車の旅人ともたくさんすれちがいました。すれちがう時、みんな中国語で「加油（がんばれ）！」と声をかけて手をふってくれます。ぼくは手を放すことができないので、大きな声で「加油！」と声をかけます。おうえんし合うことで両方も元気になります。ぼくのTシャツには日本の国ぎがかかれていました。と中で休んだお店のおじいちゃんやおばあちゃんは、日本の国ぎを見て喜んでくれました。そして、ぼくの頭をなんどもなでながら「加油！」といてくれました。旅が終わって、帰りの電車の車しょうさんと仲良しになりました。車しょうさんは9月に一人で行くそうです。「しまなみ街道」というところを自転車で走りにいく事を、英語と中国語で一生けんめい説明してくれました。日本でがんばってほしいから、ぼくは車しょうさんに「加油！」と声をかけました。車しょうさんは、ぼくの頭からぼうしをとって、自分のぼうしをのせてくれました。



【評】 加油！加油！と交わし続けたふれあいの自転車旅行。車掌さんと深く心を通わせた親善旅行。この電車の座席のように愛でいっぱいだ。

環境大臣賞

自給自足のすばらしさ

宮脇 玲子 東京都 世田谷区立中里小学校 6年

今、世界で環境保護を大切にしないといけない事がたくさんある。その中の一つは電気です。電気を無だ使いして、環境に大きな影きょうを与えています。そして、祖父の家では、周りが自然豊かなことを利用し、近くに流れる川に、自分で作った水車をとりつけています。そして、この水車で、家で使う電気をつくっているのです。ほんとうに少ししか環境保護に役立たないけれど、こうやって自分たちで電気をつくり、自給自足している事がいいなと思いました。この水車は私たちのように電気を無だ使いしている人たちの尊敬すべきものだと思います。



【評】 緑の森の水車が生んだ電気の明かり。自然に優しい、これほどクリーンなエネルギーはないでしょう。自然の恵みに感謝そして大切に。

川が…

三山 瑚太郎

東京都 世田谷区立祖師谷小学校 4年

近所の川はきれいですか？ それともきたないですか？ ぼくは京都へ帰省した時に七谷川という川へ行きました。そこは水がとてもきれいでとうめいでした。サワガニやヤゴ、カワヨシノボリなどきれいな川にしかない生き物がいました。最近トンボが少なくなってきていると聞いたことがあります。川が汚れてヤゴが育たないみたいです。ヤゴやカワヨシノボリ、サワガニが住みやすいこのようなきれいな川を守りつづけてみたいです。

評 きれいな川ですね。生き物いっぱいのにぎやかな川ですね。この川を守りたい。どの川もこの川のように生きた姿を取りもどしたい。



小さな世界の命のつながり

前田 遙香

香港日本人学校小学部香港校 6年

日本環境
教育学会賞



ここってそんなに住みやすい？ 今年も窓の外にアシナガバチが巣を作っている。暑い日も雨の日も休むことなく働いて、自分たちの仲間を増やすために頑張っている。ある日、女王蜂？ と思うくらい大きいハチがやって来た。幼虫の世話をするのか？ と思ったら、何とそれはスズメバチ。アシナガバチのさなぎを巣から引っ張り出してバリバリ食べてしまった。自然界って厳しい。弱肉強食。自然の中で生きているから、逃れられないことだってある。でも、そこをどうやって生きていくのか考える事って大切じゃないかな。人間だって生きていくには大変な時もある。厳しい自然界で生きているハチから、頑張ろうというエールをもらった気がした。

評 自然の中に入っていけば見えてくる。弱肉強食の世界。その中を生き抜く仲間どうしの力。働き続けるがまん強さ。学ぶことが多い。

毎日
新聞社賞

あり

ディクソン 那未

香港日本人学校小学部香港校 4年



あ 大きなせみをみつけたよ このせみを家にもってかえろう
よいしょ よいしょ おもたいな みんなで 力をあわせてね
よいしょ よいしょ おもたいね まだまだ 家は さきのほう
よいしょ よいしょ おもたいな どんどん なかまが ふえてきた
よいしょ よいしょ がんばるぞ
そろそろ家につきますよ

評 ありの顔って、よくよく見るとかわいいな。ありの口って、よくよく見るとすごいな。ありの力って、みんな合わせるとすごいね。

せみのしっばい

田澤 航太

東京都 品川区立清水台小学校 2年

毎日小学生
新聞賞



2日前公園の前でせい虫になるせみがしっばいしてしんでいるのを見つけました。ぼくは、せい虫になるときあつすぎたのがげんいんだと思います。もっと夜おそくにせい虫になれば、すずしくてしなずにすんだのにと思いました。あつすぎるかんきょうで、虫は生きていけない。虫たち！ あつさに気をつける！！

評 「なつが来たよ」と鳴くこともなくて消えていったせみの命へのいたわりの心と、温暖化へのさげびが、シーンと伝わってきます。



人を支える

パートナー〜大切な相棒〜

石原 遙菜 6年

ふだんにげなく見ている犬だけど、犬も働いているって知っていますか！？犬は人を支えるパートナーであって、大切な相棒なのです。みなさんも働く犬をみたらあたたかく見守ってあげてください。



この夏を生かしてあげよう

小川 響 6年

友だちと、田舎の方へ行ききました。すると旅館の裏に、蛍が光っていました。暗闇の中、点々と光る蛍を見て、心がジワーっとしました。その後、資料で調べると、蛍は1週間ほどの命で、それでも、人間に力をくれるのは、すごいと思いました。

入選作品



赤はらイモリの赤ちゃん

高塚 瑛大

東京都 日野市立夢が丘小学校3年

ぼくは、毎年夏休みに、山形のしんせきの家にあそびにいきます。しんせきの家の池には赤はらイモリがすんでいて、毎年つかまえるのをたのしみにしています。赤はらイモリはきれいな水にしかすめないときました。これからも、赤はらイモリとあそびたいので、いきものがいつまでもすめるかんきょうをたいせつにしたいと思いました。

未来のしゅう集車

大野 萌絢

京都府 長岡京市立第九小学校4年



ぼくの住む長岡京市には大切なものがいっぱいあります。れき史ある光明寺や勝竜寺城、長岡天まん宮。みんなに親しまれているメジロや、きりしまつつじに、おいしいたけのこ。この大切な物を守っていきける、きれいな長岡京市を、目指していきたいです。長岡京市のゴミしゅう集車は、みんなの家庭のゴミを集めきれいな、長岡京市をつくっています。そんなしゅう集車と長岡京市の大切な物を一つの絵に表しました。



なかま

宮田 朗禎

東京都 荒川区立瑞光小学校1年

なつやすみに、おばあちゃんのいなかに行きました。しぜんをよくかんさつすると、やまにもうみにもたくさんのおいしものがくらくらして、ちきゅうはにげんだけのものではないんだとおもいました。それまでいやだったちいさなむしが、ぼくにはなしかけているようにかんじます。でんせんをわたるサルに、あいさつしたくなります。しよくじちゅうのカニが、いそがしいからはなしかけないでといっています。あさがおが、おはようとおほえんでいます。また、いろいろなどうぶつに、あいに行きたいです。

かわいそうなクラゲ

四百目 望桜

東京都 小平市立小平第三小学校1年



おぼんやすみにかぞくでうみにいきました。わたしはうみにいくまえにテレビでクラゲにさされてる人を見て、いたそうだったから、クラゲがにがてです。でもじっさいじぶんの目でみて、きたないごみだらけのうみの中でおよぐクラゲのすがたは、かわいそうでした。うみをもっとキレイにしてあげたいとおもったし、うみもかわいそうだとおもいました。みなさん、うみであそんだら、かならずゴミは、もちかえりましょう。しょうらいクラゲのけんきゅういんになりたいです。



同じ地球で

佐藤 菜奈

東京都 荒川区立第三日暮里小学校4年

「見て、木の枝から木がはえてる。」私はおどろいて、大きな声で言った。今までに見たことのない光景に、くぎづけになった。つくば山に登った時みつけた不思議な木。その木を見た時、自然の強い生命力を感じた。大地に根をはって生きる木。その恵みを受けて生きる動物たち。そして私たち人間も、みんな同じ地球に生きている。私たちは、普段あまりそういうことを考えずに生きていないだろうか。理由はさまざまだけど、環境汚せんや森林ばっさい等、人の都合で動物も命も、地球そのものもおびやかされている。昔から自然と共存してきたはずなのに。地球に住む仲間として考え直す時ではないか。この美しい地球を守るために。



おおーきなにじ

田井 洋一

東京都 台東区立根岸小学校2年

雨があがったら、おおーきなにじがでていたよ。じいちゃんといえと、かもつれっしょと、むこうの山が、すっぽりはいっちゃった。にじ、きれいですごい。

挿し木

古木 伽耶

神奈川県 相模原市立鶴野森中学校2年

私は「挿し木」について考えました。私の家には、枝が長くてとても高い「ウンペラータ」という木があります。その木がのびすぎているので、枝を切ってまた小さい木を育てはじめたり、いどこにわけたりしています。このように、少しずつ木を増やしていくことによって、酸素がふえて環境にいいことを改めて感じました。しかも、タネから育てるよりも早く大きく育ちます。そして、1つの木から何個かにわけるので、良いところを受けつぐことができます。私の家ではいろいろな木や草、花を育てています。それらは、私たちの生活にかかせない大切なものです。植林などもありますが、身近な家にあるものでも、少しずつ環境にやさしいことをしていきたいです。そして、一人一人が“植物”を大切にすることで、これからの将来につながると思います。



未来のひじ川

源田 颯龍

愛媛県 大洲市立三善小学校5年



ぼくは、「未来のひじ川」という絵を描きました。言葉でいうと、こういう二つのまとりにすることができます。まず、一つ目は、絵の中のチューブです。チューブは、空から見るとひじ川と川の中から見るとひじ川です。なぜかという水族館のように目の前に魚が泳いでいるところを見たいので、水の中からのチューブに入って見られるようにしました。空から川の上を見るチューブでは、飛びはねている魚、しらすギやおおサギ、それからいろいろな生き物や風景が見られて、とても心がおちつきます。二つ目は、この絵を描いたわけです。それはひじ川にごみなどのはいき物をふやしてほしくないからです。もしそういうことが守れたら、この空からのチューブ、川の中のチューブが実現できるから川をきれいにするボランティア活動をして、川をきれいな川へと変えて、「きれいなひじ川」にしたいです。

みかんとわたし

高村 直央

東京都 品川区立清水台小学校1年



わたしは、ねんちゅうさんのゆるやすみにさがおじいちゃんとおばあちゃんのおうちで、みかんとをたべました。とってもおいしかったので、おにわにタネをうえました。そのタネからめがでて、いまは、わたしのおなかぐらいになりました。みかんとわたし、どちらが大きくなるか、きょうそう中です。

くもをたべる

金沢 咲優

大阪府 大阪市立中浜小学校1年



そらをとんでみたいからくもをたべてみたい。だって、くもは、そらをぶかぶかういているから。いただきます。もくもぐ。

山のいがいがぼうず

青山 和平

徳島県 藍住町立藍住南小学校2年



くりのいがいがをはじめて見た。はりがいっぱいできるといって。はさみでいがいがをはがしてやるとつやつやしたくりがでてきた。くりはふたつなかよくはいつている。きょうだいなんだな。まるでいちゃんとおく。いがいがの中はきつとあたたかいんだらな。おかあさんのおなかのなかでいるようなんだらな。おばあちゃんにくりごはんしてもらった。おいしかった。

土の焼き物

天藤 陽世里

広島県 尾道市立高見小学校6年



私がこの作品を作ったのは、土の大切さを分かってもらうためです。土は、私たちの身近な存在だし、生活にもかかせないものです。たとえば、土かべや、食器、野菜を育てるにも土が必要です。そのほかにも、私たちが気がつかない所で土は活やくしています。私は、土で茶わんとコップの焼き物を作りました。こうして、自然のあたたかさを、じっかんして、土だけでなく周りの自然も守っていききたいと思っています。

思いだそう日本の昔のちえ

塚本 偲央

東京都 日野市立日野第八小学校4年

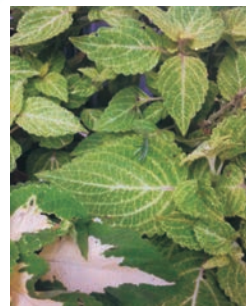


私が「日本の昔の知えで地球をすくう!!」と思ったのは、日本の昔の知えを使えば、とってもエコだと思ったからです。たとえば、すだれ、打ち水、うちわ、風鈴などは、扇風機やクーラーを使わなくてすみます。ほうき・ちりとりはそうじがいらしません。そうじは大変だけどとっても便利です。ゆたんぼは暖房を使わなくてすみます。これらのものは、地球温暖化をふせいだりせつ電になります。私は、日本の昔の知えは、とってもすばらしいものだと思います。

かくれんぼ

中田 千智

東京都 品川区立清水台小学校6年



これは、どこでとったものだと思いますか。実は、旗の台のおじいちゃんの家です。都会でもバッタの赤ちゃんを見ることができるのですね。毎年エメラルドグリーンのバッタの赤ちゃんが生まれます。バッタは飛ぶのが速いので、つかまえるのは、難しいです。でも、おばあちゃんにつかまえることができます。都会でも必死に生きているバッタはすごいと思います。そして、バッタも未来のために子孫を残してほしいです。

◎審査委員(敬称略)

児島 邦宏 (東京学芸大学名誉教授)

山口 和宏 (環境省総合環境政策局 環境教育推進室室長補佐)

角屋 重樹 (日本体育大学教授)

朝岡 幸彦 (日本環境教育学会企画委員長/東京農工大学教授)

邊見 公子 (全国小中学校環境教育研究会役員/杉並区立桃井第二小学校校長)

須藤 晃 (毎日新聞社「教育と新聞」推進本部 とも環境・文化研究所所長)

小林 一光 (教育出版株式会社代表取締役社長)





地球となかよしゼミナール

博物館の学芸員による、3回にわたる環境学習アドバイス。
最終回は、展示から学ぶ「関係性」について解説していただきます。

モノ・コトの関係性を見抜く視点

— 博物館の展示で編集力を養う —

神奈川県立生命の星・地球博物館 ● 主任学芸員 田口 公則



ストーリーを持つ展示室



分類による資料展示

博物館では、それぞれのテーマに沿って資料（モノ）を蓄積しています。また、資料をベースとした活動、「資料の収集」、「資料の整理・保管」、「調査・研究」、「教育・普及」が博物館の機能です。

事物事象の編集—博物館の展示—

環境学習にとって重要なことは、まず自分に身近な自然や社会の環境を知ることでしょう。そして、それらを広い視野で結びつけ理解する力を育てることが大きな目標と捉えています。そうすれば自ずと、私たちが何をすべきか人との環境との関わりについて考えることにつながるでしょう。しかし、身近なモノ・コトについて知識や情報は持ち得ても、それらの関係性まで深く考える機会は少ないかもしれません。手軽に情報検索ができる現在、知識・情報を多く持つこともさることながら、事物・現象から関係性を把握する力が重要と考えます。

関係性の認識力

別の言い方をすれば、「資料の編集」といつてもいいでしょう。複数の資料を編集することで、「事物事象の編集を通して関係性」が生まれてきます。博物館の展示は、ある主題をもって展示物が並べられています。多くの場合、複数の展示物が展示コーナーを構成していることでしょう。ひとつひとつの資料が持つ情報とともに、資料と資料の組み合わせによる情報が存在しています。自然系の博物館では、自然から切り取ってきた資料を展示していますから、すなわち自然界での事物事象の関係性が示されていることとなります。

展示室でモノ・コトの関係性を学ぶ

博物館の展示が資料の関係性を示しているのであれば、その関係性を学ぶ場として展示を利用できるはずです。どうぞ森羅万象の自然を見てください、と放り出されると一体何を見てよいのか戸惑ってしまいます。しかし、博物館の展示—展示企画者により編集された自然—を観察し、その中にモノの関係性を見いだすことは幾らかのヒントで可能となるでしょう。自然の中の関係性を見つけるよいトレーニングになると考えます。しかし、モノを見ずに教科書的にその関係性をおぼえるスタイルはおすすめしません。できることなら、自分自身が持つ知識と経験に基づいて展示物の関係性が導き出されることが理想です。

自分の実感を基に関係性を考えてみる

展示室がモノ・コトの関係性を見つける場となることを期待します。しかし、学芸員の視点を持ってその関係性を見つけることは専門家でなければ難しいこともあるでしょう。なにも博物館が示す展示ストーリーに準じて学ばばかりではありません。むしろ、自分もつ体験の文脈にそって、展示との接点を見つければ、自由であるというスタンスに立てば、展示ストーリーを離れて自分のオリジナルの関係性を見つける遊びも一つの方法です。展示の構成を一度バラバラにしてから、各要素について自分なりの関係性を見いだしていくパズルの楽しみがあってもよいでしょう。

展示室で気になるものにカメラを向けることで、意識したものを写真記録できます。撮った画像は後から自分が見たものをふりかえる材料になります。ざらりと写真を並べ、気になった展示にメモを付けたり、写真をグループピングとといった作業は、自分の視点によるモノ・コトの関係性を見つめる手立てになりそうです。



デジカメ記録写真で展示をふりかえり

神奈川県立生命の星・地球博物館
〒2590-0031 神奈川県小田原市人生田409
<http://hi.kanagawamuseum.jp/>
TEL.04695-21-1515

コラム
「道徳」教科化をめぐる(全2回)

なぜ道徳教育が 求められているのか (下)

上越教育大学 副学長
林 泰成

OECD(経済協力開発機構)が3年ごとに実施している国際的な学習到達度調査があります。通常、PISAと呼ばれている調査です。順位が発表されると、マスコミで「日本の順位が上がった、下がった」と大騒ぎになるので、皆さんもよくご存じのことでしょう。

このPISAの2015年度の調査で、協同的問題解決能力を測定する問題が出題されます。このことは、すでにOECDのホームページで公表されています。ここに言う協同的問題解決能力とは、2人以上の者が協同して問題解決にあたる能力です。

公開されているサンプルを見ますと*、受験者に、パソコン上の架空の人物と協力しながら問題を解決させることで、そうした能力を測定しようとしています。この場合、測定するのは個人の能力ですが、しかし、こうした問題の本質を考えると、本当に測定すべきなのは、個人を超えた関係性の中に存在する能力であることは明らかです。こうした協同的問題解決能力を測定する問題が、国際的な学習到達度調査に入るといことは、そうした能力の育成を、各国に要求しているということにほかなりません。

なるほど、社会に出れば、個人の能力で問題解決にあたるよりも、皆で協力しながら問題解決に当たることの方がずっと多いように思います。

では、こうした能力は、学校のこういった場で育成されるのでしょうか。

教科や科目の学習の中で、アクティブ・ラーニング



を用いて、協力し合いながら学習を進めるということもその一手段であると言えるでしょう。しかし、そうした学習が成立するためには、人間関係や思いやりの心などを育成する領域が重要であると私は考えます。そうした点でも、道徳教育が強く求められています。

しかし、その道徳教育が道徳的価値を教えるだけであるなら、不十分であると思います。実際に集団活動の中で生かされるような取り組みでなければなりません。たとえば、学級活動と連動するとか、体験活動につなげるとか、そうしたことが求められます。

幸いにも、2014年10月に中教審より出された「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)」を見ますと、提案されている「特別の教科 道徳」(仮称)では、さまざまなアプローチも想定されているようです。たとえば、「道徳的習慣や道徳的行為に関する指導、問題解決的な学習や体験的な学習、役割演技やコミュニケーションに係る具体的な動作や所作の在り方等に関する学習などの指導を、発達の段階を踏まえつつ取り入れることも重要である」と記されています。協同的問題解決能力の向上にも資するものとしてとらえることができるのではないのでしょうか。☺

*OECD, "PISA 2015 DRAFT COLLABORATIVE PROBLEM SOLVING FRAMEWORK", MARCH 2013, pp.50-61.

イラスト ひらた ゆうこ <http://rakugakiya-yh.com>

第13回

地球となかよしメッセージ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864 <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

作品募集
(2015年7月1日
~9月30日)



*第12回(2014年度)作品のお問い合わせについても、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

ドナルド・キーン・センター柏崎
理事・学芸員

復興の祈りを込めた古浄瑠璃復活初演

中越沖地震の前年、キーン先生のご養子である上原誠己さんにご出演いただいた「柏崎飯塚邸から世界への発信・美しい地球環境と和の心」と題した企画を、故郷柏崎を深く愛する市民ボランティアにより行ったことが「ドナルド・キーン・センター柏崎」につながるきっかけとなりました。

中越沖地震の影響による原子力発電所施設の火災という危機的状況が起きた時、「技術や知識を正しく使うためには、人としての在り方を地球市民一人一人がもう一度考えなければならぬのでは」と思われました。そんな時に、現存する日本最古の即身仏をモデルとした古浄瑠璃「越後国柏崎・弘知法印御伝記」を300年ぶりに復活初演をするという、ドナルド・キーン先生ご提案の企画が、上原さんを通じて私の手元に届いたので。さっそく、文学・文化に造詣の深い霜田文子さん（游文舎企画委員）にご相談しました。彼女は、自ら実行委員長となって市民ボランティアによる実行委員会を作り、企業協賛を募って、被災した市民・企業の復興への祈りが込められた復活初演を大成功に導きました。

しなやかな心

キーン先生のロンドンピア大学での恩師・角田柳作先生は、「ワン・イズ・イナフ」(一人で

吉田眞理さん

も学びたい生徒がいれば、授業を行うのに十分です」の意」と、キーン先生お一人のために授業をなさったそうです。

また、キーン先生は、ハワイの捕虜収容所で、捕虜の皆さんを励まし、敵味方の区別なく共に音楽を聴き、亡くなった兵士の手帳を遺族の元に届けようと、焼野原となった東京の街を一人歩き回ったとうかがいました。

先生のそのお姿、優しい想いは、中越沖地震で被災しながらも市民を勇気づけようと企画を成し遂げたスタッフの皆さんのしなやかさや、協賛してくださったメセナ企業、さらに、今もセンターを静かに支えてくださる多くの市民ボランティアの方々のお心遣いと、共通しているようにも思えます。

ドナルド・キーンという「人の在り方」とセンター設立の流れの中に一貫して流れているものは、さり気ない哲学と行動の美学です。



初めて先生のお宅に伺い、色々なお話をさせていただいた中で、「国際人とは、『あなたと私は同じ』という感覚を持っている人」という先生のお言葉が印象的でした。今まで先生と一緒にしながら、その言葉を、その場の「空気」として感じ、先生の中庸な心を、時空を超越している絆、「慈愛」と感じています。

柏崎から世界へ

中越沖地震と東日本大震災の3年半の間にくきたキーン先生と柏崎のご縁は、ふるさとを愛する人々の、小さなさりげない優しさの連鎖に始まり、日本企業の皆様によるメセナにつながって、さらに、全国の産学官民の人々との共働の中で、美しい波紋を広げ始めています。

命を育む、大切な美しい「大地」。未来の、平和と希望ある世界を創る「人」。これらを今後、日本の各地域で創り上げてゆくモデルの一つが、我が愛する故郷柏崎です。味楽・無楽・響楽・学楽・清楽・遊楽・慈楽、様々な楽しさを、ドナルド・キーン・センター柏崎から世界の深層に静かに発信していきます。

よした まり 新潟県柏崎生まれ。実践女子大学文学部英文学科卒業。現在柏崎在住。現在、公益財団法人フルボン吉田記念財団理事、ドナルド・キーン・センター柏崎 担当理事。
<http://www.donaldkeenecenter.jp/>

ドナルド・キーン・センター柏崎
・冬季休館 2014年12月26日(金)～2015年3月9日(月) (冬季休館中も各種イベントを開催予定)
・冬季休館中の問い合わせ先 ドナルド・キーン・センター柏崎
T 945-0063 新潟県柏崎市諏訪町10-17
・電話/FAX 0257-285755 月曜日～金曜日 10時～17時
・2015年度開館 2015年3月10日(火)より。また、20名以上の団体の皆様からの見学のご希望については、ご対応させていただきます。詳しくは、センターまでお問い合わせください。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆「北から南から」アイヌ文化と和文を同頁に掲載されている編集レイアウトが大変気に入りしました。(京都府 坪井良夫)
- ◆子どもたちを中心に、学校教育現場を基盤にまとめられた「明日の子どものために」の実践事例集、すばらしいと思います。何もできない私ですが、心から応援をさせていただきたいと思います。「記憶を父として、記録を母として、そこから、知恵という子どもが生まれる」という言葉を思い出しました。(愛知県 青木三芳)
- ◆千歳市立末広小学校の「本物の体験から『生きる力』を育てる」取り組みに感動。保護者はもとより、地域の方々の協力を得て、「本物」の価値に気づかせ、五感を活して『生きる力』を育てる実践は素晴らしい。(山形県 佐藤敬彦)
- ◆「コラム『道徳』教科化をめぐる」を興味深く読ませていただきました。林先生が書かれているように、「道徳」教科化は「もはや止めようがない勢い」であることは教育関係者だけでなく、多くの国民が感じているように思います。この状況の中、「いじめ対応への即効性」への疑問や道徳教育のあるべき姿について、わかりやすく記述していただいております。大変参考になりました。(北海道 武田隆雄)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。